近代地理学の祖
長久保赤水（1717～1801）

長久保赤水顕彰会　2020年9月

長久保赤水は、江戸時代の儒学者である。高萩市赤浜の農家に生まれ、学才を認められて第六代水戸藩主治保の侍講（教師）となり、江戸に勤務するかたわら、地理学・天文学・農政学等多岐の分野にわたる研究成果を残した。2020年3月19日、国は赤水資料750点を歴史資料として重要文化財に指定した。

赤水を育んだ社会情勢

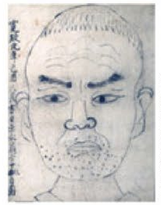
江戸時代の武家は、その地位を保持する上からも学問を学び教養をつむべきものとされ、藩校を設けて主たる学問として儒学を学んだ。また、藩主は自分の教養を高めるために儒学者を招いて講義をさせ、重臣たちにも聴講させた。一方、庶民は寺子屋や私塾等で学び、赤水も鈴木玄淳塾で儒学を学んだ。第二代水戸藩主の徳川光圀は、「大日本史」編纂のために史局である彰考館を小石川に開設（1663）、その後主な史館員を水戸へ移転させて水戸彰考館を発足（1697）するなど、学芸振興の政策を取った。彰考館には全国各地から集められた資料が納められ、史館員による研究が進められた。光圀の死後、学芸振興の機運はしだいに停滞しましたが、第六代水戸藩主治（赤水を侍講とした藩主）の時代になってようやく復興した。赤水と親交のあった立原翼渠は彰考館の文庫役、子の立原杞軒は彰考館総裁を務めており、赤水は彰考館の資料を閲覧する機会に恵まれていた。また、学芸、文化の発展が庶民によって進められた時代、赤水は各地の文化人と進んで交流し、多くの知識人から豊富な情報を得ることができた。

赤水図（改正日本輿地路程全図）の変遷を比較しよう！！

ここでは、高萩市歴史民俗資料館が所蔵している原図、初版、第２版、第３版、第４版、第５版の６図を掲載して、長久保赤水（１７１７～１８０１）の「改正日本輿地路程全図」の変遷を紹介する。江戸時代後期の約100年間のベストセラーであり、吉田松陰や江戸時代の庶民、さらには、伊能忠敬などが見ていた地図である。これらの６枚の地図の細部を比較すると赤水図の様々な変化と発見があることがわかる。

《長久保赤水関係資料６９３点》

国の重要文化財指定記念



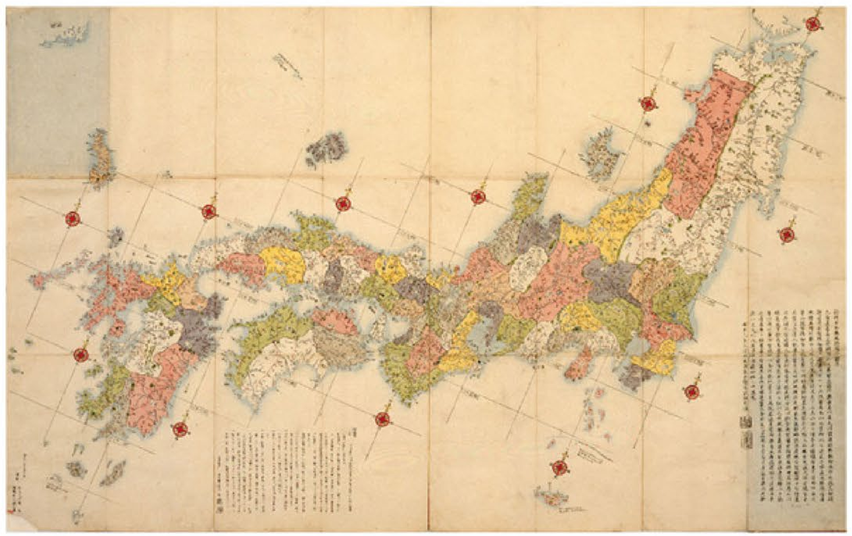
長久保赤水『自画像』
高萩市歴史民俗資料館蔵
（長久保智保家寄贈資料）

高萩駅頭に建つ長久保赤水像

長久保赤水『自画像』
高萩市歴史民俗資料館蔵
（長久保甫家寄贈資料）

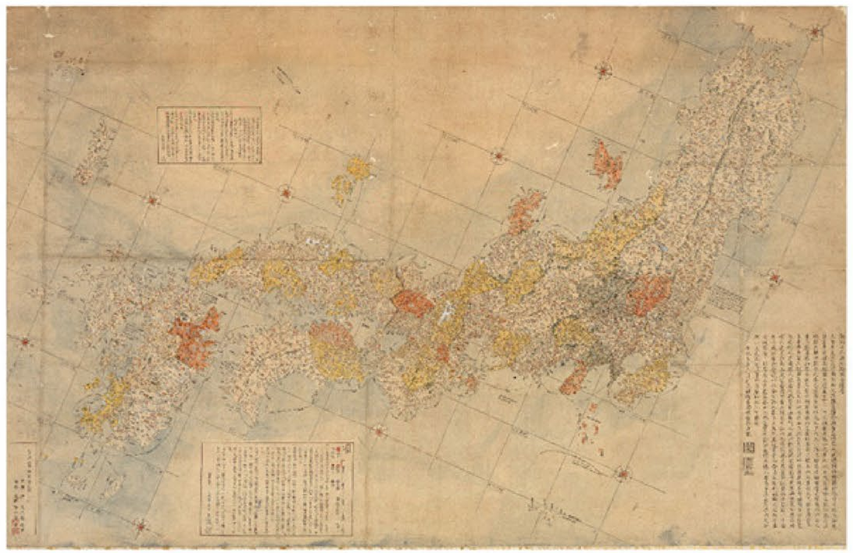
改製日本分里図　長久保赤水手書図　84.6×134.8㎝（全 92.7×190㎝）　明和5年（1768）日本地図の原図　高萩市歴史民俗資料館所蔵（長久保甫家寄贈資料）

赤水は、赤浜村で20年以上の歳月を費して、この「改製日本扶桑分里図」（赤水図の原図）を製作した。地形や地名には胡粉による多くの修正痕や和紙を何枚も重ねて書きなおした跡が残されており、長久保赤水が考証しては、そのつど修正していたことがみてとれる。本図には、鹿島灘を塞ぐように貼紙が貼られており、そこには「改製日本（扶桑）分里図」と記され、明和5年（1768）の年号をもつ。扶桑とは日本の異称である。本図は「改正日本輿地路程全図」の原図と考えられている。しかし、今回の文化庁の調査で、扶桑に付けられた○は消去のしるしであると分かった。今までは、扶桑を強調しているものばかりと思っていたので「改製扶桑（日本）分里図」と表記してきたが、今後は「改製日本分里図」と改めて表記することにした。また、この図は「安井春海の所考」として、はじめて緯度を記入した日本図である。奄美群島や琉球諸島は描かれていないが、蝦夷地の南端、対馬、朝鮮半島南東端は描かれ、さらに日本海には竹島と松島が描かれる。



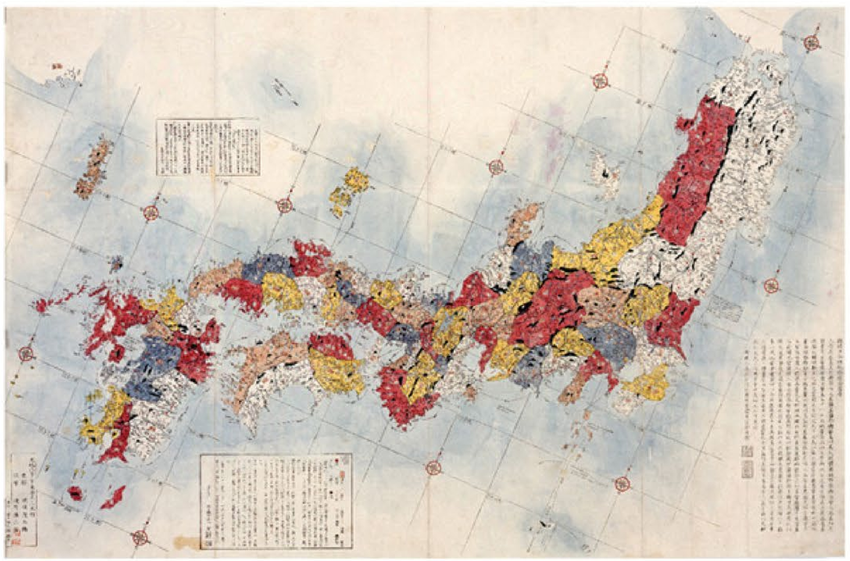
改正日本輿地路程全図　安永８年（１７７９）初版　81.8×131㎝　高萩市歴史民俗資料館所蔵（長久保赤水顕彰会寄贈資料）

この「改正日本輿地路程全図」の初版は、安永8年（1779）に完成、翌年の春、大坂で出版された。この図は、10里（約40㎞）を1寸（約3㎝）とする約129万6千分の1の小縮尺の日本図である。それまでの刊行日本図とは異なり、緯線と経線を引いた点で、画期的な刊行日本図である。大坂の書肆浅野弥兵衛より刊行。讃岐国の儒者柴野栗山（1736～1807・寛政の三博士）の序文があり、赤水は栗山と学問的交流があったことがわかる。高萩市歴史民俗資料館蔵の安永8年版「改正日本輿地路程全図」は、4点あるが同じ刊行年であっても、何度も赤水が修正を加えていたことがわかる。本図には、右上部の大島・小島が書かれていない。また、下北半島は蓑口形に描かれており、下北半島をはじめ、古河周辺の河川、牛久沼と小貝川、館林、大和国の奈良・春日、讃岐国の屋島などを比較するとその違いが分かる。4点の中では最も古いものである。さらに、約4，200の地名情報などが掲載されている。



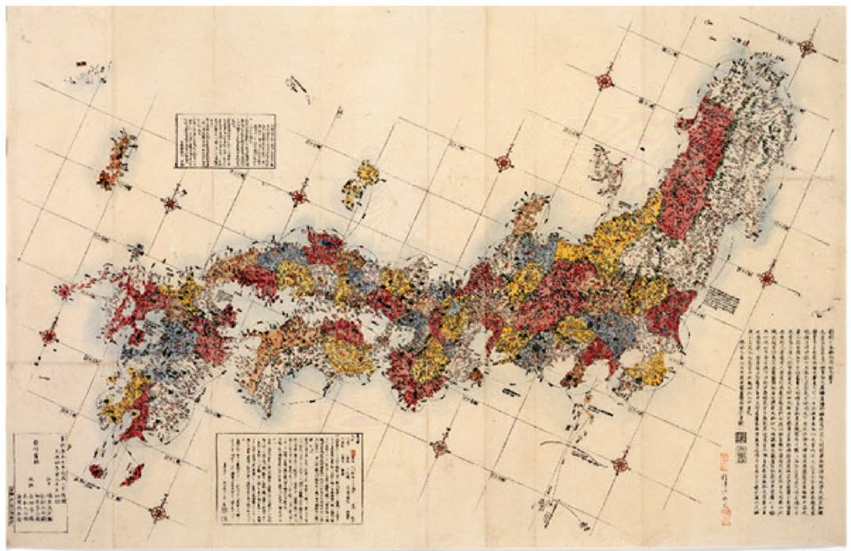
改正日本輿地路程全図　寛政３年（１７９１）第２版　83×128.5㎝（全 134.5×179㎝）　高萩市歴史民俗資料館所蔵（長久保甫家寄贈資料）

次に、赤水図の集大成ともいえる第2版である。高萩市歴史民俗資料館蔵の寛政3年（1791）「改正日本輿地路程全図」の第2版は3点あるが、この図は着彩試作品と思われる。初版図との大きな違いとしては、海路（港から港までの距離）や郡分図（郡名の記入）、図の左上の潮汐考証部の付加などが挙げられる。また、第2版から四ツ倉沖には、初版にはない赤井嶽燈の書き込みが見られる。さらに、地名表記などの情報量も飛躍的に増加し、国の色分け彩色も変化した。赤水が存命中に編集したのは、集大成ともいえるこの第2版図までである。初版とこの第2版を見比べてみると、地名情報なども約6，000と飛躍的に増加している。同じ赤水図でも初版とは、全くの別物であることがわかる。本図では、【是日伊豆七島】となっており、伊豆七島への里数は、まだ、入っていない。赤水図はこれで完成した。第3版以降は、第2版の情報をそのまま使用することで刊行されていった。



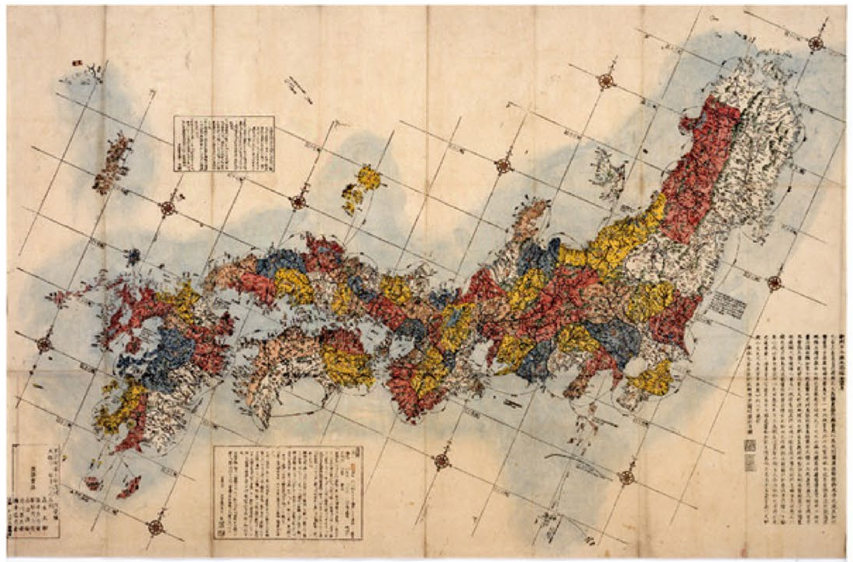
改正日本輿地路程全図　文化８年（１８１１）第３版　85×129.7㎝　高萩市歴史民俗資料館所蔵（横山功氏寄贈資料）

赤水没後に出版された地図。この第3版からは、大坂だけでなく、江戸でも販売され、東都：須原屋茂兵衛、浪華：浅野弥兵衛とある。その後、同じ第3版でも、東都1軒、浪華5軒と次第に販売する書肆（書店）も増えて、幕末までのベストセラーとなった地図である。



改正日本輿地路程全図　天保４年（１８３３）第４版　87×134.6㎝　高萩市歴史民俗資料館所蔵（横山功氏寄贈資料）

赤水没後に出版された地図。この天保4年の第4版では、江戸：須原屋茂兵衛、柳原喜兵衛、吉田善蔵、赤松九兵衛、浅野弥兵衛とあり、江戸1軒、大坂5軒となっている。



改正日本輿地路程全図　天保１１年（１８４０）第５版　85.7×130.4㎝　高萩市歴史民俗資料館所蔵（横山功氏寄贈資料）

赤水没後に出版された地図。この天保11年の第5版では、浪華書林：森本太助、浅井（ママ）吉兵衛、柳原喜兵衛、吉田善蔵、前川善兵衛、橋本徳兵衛とあり、浪華の6軒となっている。